

人帰人，文帰文 鐘叔河による周作人作品の編集校訂について

蔭 山 達 弥

〈Summary〉

Zhong Shuhe is a famous publisher, and a well-known scholar. About over twenty years old, he became staff reporter in the news paper office. He was regarded as the Right by mistake, in 1957. During the Cultural Revolution, he was made prisoner over a long term of ten years. Since perform the policy, 1979, he engaged editorial work on Hunan Renmin Chubanshe.

Zhong Shuhe is a person of learning. Everyone respects him. His courage and judgment is worthy of respect. He was the first to edit the collected works of Zhou Zuoren, and Ceng Guofan. These publications created a great sensation with equal fluency.

In this paper, I would like to look back on Zhong Shuhe's achievements.

1. 鐘叔河略伝

鐘叔河は1931年生まれ、湖南省出身。編集者、学者、エッセイスト、国務院より特殊手当を受ける専門家である。

鐘叔河は二十歳を過ぎて、新聞社の記者になり、1957年、『民主、自由…に関する四十八条』党外新聞『同人報』を運営することを主張したため、右派と看做され、公職を解かれた。1970年、「プロレタリア文化大革命を中傷、攻撃した」ことにより、10年の長きにわたり、捕らわれの身になった。1979年、誤った判決を正され、出獄し、湖南人民出版社で編集に従事した。“走向世界丛书”（世界に向かう叢書）は鐘叔河編集した最初の図書であり、もとの計画では100冊だす予定であったが、様々な要因で36冊を出版するに留まった。このシリーズは中国の出版界で今日でも極めて大きな影響を与えている。当時の中国は閉じられた鎖国の状態から目覚めたばかりで、鐘叔河が計画したこのシリーズは広い視野で、欧米や日本の文化を紹介した。当時の同業者たちは鐘叔河の壮挙と気迫に襟を正して尊敬の念を抱いた。

鐘叔河の学識には本当に感心する。彼の胆力と見識はより一層尊敬に値する。鐘叔河は中国国内でいち早く大型シリーズの図書、『周作人作品集』と『曾国藩全集』の編集を主張した。中国近代史において、周作人と曾国藩は共に論争を起こす人物であり、出版界で強い反響を起こした。

拙稿では、反響を呼んだ鐘叔河による周作人作品の編集校訂について振り返る¹⁾。

2. 漢奸裁判

益井康一（ますい・やすいち）氏は1939年から1945年まで毎日新聞社中国特派員として華中、華南、華北で中国問題の報道にたずさわり、帰還後「漢奸裁判」に関する中国の各新聞や、外電等の資料を集めて保存した。引きつづき今日まで新資料の蒐集につとめ、戦後31年にして、いぜん未知のまま残されていた巨大な歴史の不連続線のあとをありのままに明らかにした。益井氏の『漢奸裁判史 1946-1948』（みすず書房 1977.4.8.）は現代史のまた日中関係史の、重要な欠落部分を埋める書物である。

中国大陸では日本軍降伏後、勝者の蒋介石国民政府および中国共産党政府が、敗者の汪兆銘国民政府関係者を、「漢奸裁判」の名のもとに、激しい断罪を行なった。その時期は中華民国35年（昭和21年）4月から、民国37年（昭和23年）9月までの、2年5ヶ月間であった。

『漢奸裁判史 1946-1948』の「十四 文化人」において、益井氏は周作人について、次のように述べている。

いわゆる「文化漢奸」の巨頭として注目を浴びたのは、周作人であった。彼は日本の立教大学文科を卒業している。

中国文壇の大御所、中国の代表的散文作家、そしてまた五四運動以来、革命中国の新文化運動の輝ける指導者として、世界的にきこえた彼が、なぜ「漢奸」の名を被らなければならなかったか。それは日本軍占領下においてつとめた華北政務委員会教育総署督辦、北京大学文学院長、東亜文化協議会長などの肩書が招いた罪であった。

周作人の公判は民国35年（昭和21年）7月19日午前10時から南京の首都高等法院で開かれた。検察官の起訴要旨陳述の後、裁判長の尋問に対し、周作人は漢奸でないことを強調して、第一回公判は終わった。8月9日の第二回公判では、被告側は反証一件を提出、9月19日の第三回公判では、被告は有利な証拠数件を提出したが、11月16日の判決は、周作人を有罪と認めて、「懲役14年」を宣告した。

3. 周作人との付き合い

1957年、右派と看做されてから、鐘叔河は労働教育の処分を受けず、自ら生計を立て、町工場で荷車を引いた。彼自身の言葉で言うと「車を引いて飲み物を売る」のであった。ちょうどそれ以降、鐘叔河は彼の人生においてめったにない平静を得た。読書の機会を得て、大量の書物を読んだ。ちょうどその頃、彼は周作人と付き合いをするようになった。彼が1980年代に復帰してから大胆に率先して周作人の作品を出版する基礎を築いた。

2006年2月、『南方都市报』のインタビュー記事で、記者の「当時どのようにして周作人と付

き合いをするようになったのか」という質問に対して、鐘叔河は次のように述べている²⁾。

抗戦八年の間、私は平江の実家にいた。実家には新しい本はなく、すべて線装本であった。兄や姉の中学校の教科書、国文、歴史、地理、動物、植物は私の一番好きな読み物になった。一番上の姉は私より8歳年上で、兄は私より7歳年上であり、兄たちの教科書の中には周作人、冰心、朱自清、叶绍钧の文章があり、私は周作人の文章に一番興味を持った。周作人の文章はわざとらしくなく、読むに耐える。初めは少し分かりづらいが、読めば読むほど面白い。「燕が行った。また来る時がある。桃がしぼんだ。また咲く時がある。」のように朗々と響く声で読み上げるのではない、しかし何度か読めばつまらなくなってしまう。『金鱼、鸚鵡、叭儿狗』という一編は、『看云集・草木虫鱼・金鱼』から取られたものだというのを後から知った。本当に百回読んでも飽きない、毎回新しい経験と感覚がある。今日に至るまでやはりその通りである。教科書の中の作者紹介、そこには『自己的园地』、『雨天的书』などの作品があり、私の頭の中に、これらの書名はしっかりと記憶され、その後一目見れば手に入れて読んだ。つまり、この人の文章は私の嗜好に合う、だから私は彼の文章が好きなのだ。

仕事に参加するようになってから、まもなく上海で出版された『鲁迅的故家』、署名周遐寿を読んだ。その中の一節『一幅画』、彼の下の弟が3歳で死んだ。母は彼に人に頼んで一枚の絵を描いてもらうように言ったが、写真もなく、どんな格好かも分からない。絵描きは全く想像に頼って描いた。この絵は母の部屋の中に前後足かけ45年掛けられた。母が87歳で世を去ってから、周作人は書いた。「この絵は私が表装を頼んで、今また私の手元に戻ってきた。…今この世で彼を知っているのは私一人になってしまった。」本当に感情極まりない文章であり、読んだ後とても感動する。

それからまた『希腊的神与英雄』（ギリシャの神と英雄）という一冊の本を読んだ。署名は周遐寿訳、とても良いと思ったが、ギリシャの神の名の多くが通用しているものと異なり、手紙を書いて出版社に質した。その頃出版社は読者からの手紙に対して、今のようではなく、とても重視していて、出版社から返事を出さず、手紙を周作人に転送した。周作人は返事を出版社に出し、また私の元に転送されてきた。私は周遐寿が周作人であることをやっと知った。それから私は彼に手紙を書き、本が欲しいことを尋ね、彼に揮毫を頼んだ。周はその度に返事をくれた。それから彼と文通するようになった。1989年周丰一が父（周作人）の品物を整理した時、私が彼の父に書いた最初の手紙を見つけて、さっそく一部コピーして私に返してくれた。

さらに記者から「彼（周作人）に手紙を書いた時、彼の漢奸問題について考えたことはなかったのか」という質問に対して、鐘叔河は「考えたことはない（没有想过）」ときっぱりと言い、次のように述べる²⁾。

周作人と日本人の協力、華北政務委員会教育総署の督辦をしたことは、確かにすべきでないことであるし、彼の一生の欠点である。しかしこれは決して彼の文章の価値に影響を及ぼさないと私は思う。私の態度は「人归人、文归文（人は人、文は文）」である。たとえこの人を完全に否定しようとしても、まず彼の文章を読まなければならない。

「この時期の付き合いがあったので、あなたは1980年代に岳麓書社から周作人の本をたくさん出したのですか」という質問に対して²⁾、

周作人の本を出版したことは、私が彼の文章を好んでいるからだけではなくて、より重要なのは、彼の思想や見識に啓蒙の意義があるからだ。40年の間、彼の本が印刷されないのは、新文化の建設にとって大きな不幸であり、方法を講じて挽回すべきだ。当時、彼の本を出すことは、危険や障害があった。その後、岳麓書社からついにすべて出すことはできず、中途半端に終わったことから、阻もうとする力の大きさが知れよう。

鐘叔河は周作人の本を出す時、一つの態度を貫く。先の質問に対する答えの最後にこう言う²⁾。

また、私が彼の本を出すとき、一つの態度を採った。私自身が周作人について書こうとはしないし、周作人について評論もしない。私に書くことを求めても少し書くだけだ、もちろん他人のようにうまく書くすべがないが、少なくとも少し早く書ける。なぜ私が書かないって。私が書く人と人を論争に巻き込むからである。私は周作人についての評論に参加しない。しかし、私が彼の本を出すときは結局のところ間違いがない。たとえ彼を批判しようとしても、彼のデータをつかまなければならないでしょう。あなたはむやみに批判してはならない、彼の文章を読んだことがなくて、どうやって批判するのだ。

4. 楊小洲「鐘叔河による周作人作品の編集校訂について」

かつて、カメラマン、図書の編集、イラストデザイナー等の職を経て、『新京報』の「書友書話」欄に何度も文章を書き、現在はフリーライターである楊小洲³⁾は、自身のブログに「鐘叔河による周作人作品の編集校訂について」という一文を公開している⁴⁾。

昔こんな話があった。「若い時は『水滸伝』は読まない、年を取ったら『三国志』は読まない。」つまり、若者は気性が衝動的であり、『水滸伝』を読めば本に書かれている義侠心にそそのかされてしまう。老人は深謀遠慮に物事を運ぶが、『三国志』を読めば計画が妨げられ、本を見れば人をそしる。読書はまさに選択の必要性がある。近年、読書についてのもう一つの話がある。「四十を過ぎてから周作人を読む。」周氏の文章は苦渋に満ちた物静かなも

のであり、中年の閲読趣味にぴったりだ。周氏は苦い茶に自らを例え、それによって苦境が終わり楽な状況がやってくることを説明し、人生の寓意にあふれている。この話には私は大いに賛同する。その訳は、遠く前の世紀1980年代、私は岳麓書社が出版した周作人の作品を購入したが、当時はその味わいを読み取れず、購入意欲も普通で、何冊か買い漏らした。現在になって周氏の文章を好んで読むようになると、当時のミスを後悔し、残念でならない。

先月初め、台湾の愛書家傅月庵と閑談する機会があり、周作人を読むことが話題になった。傅氏は岳麓書社の周作人の版本を高く評価し、その拙さを補ったことを喜び、手にとって開くと、古色蒼然とした感じあり、知堂先生（周作人）の気持ちを讀むのに丁度合っている。傅月庵がここで指しているのは鐘叔河先生が編集校訂した周作人の作品で、これらの本は前世紀1980年代中期後期に出版され、ソフトカバーとハードカバーの二種類にわかれ、ソフトカバーは単行本、ハードカバーは合冊、1949年以降周作人の新しい版本になった。

そこで少し話題を出そう。ここ数年、周作人の著作を整理、出版するのに最も尽力したのは、南方では鐘叔河氏、北方では止庵氏である。事実前世紀1970年代末、鐘叔河氏は香港三育版『知堂回想録』⁵⁾を提供し、1980年代初め朱正氏の手はずを経て湖南人民出版社から出版された。（書名は『周作人回憶録』に改められた。）このことが1949年以降、中国大陸で初めて周作人本人の名でその作品が出版され、周作人の作品が再びブームを呼ぶ始まりと言える。続いて1980年代にわたり、岳麓書社版の周作人シリーズの編集、出版は皆鐘氏の手になる。振り返って数えると、鐘氏が編集した岳麓書社版周作人の作品は《自己的园地》、《雨天的书》、《泽泻集》、《谈龙集》、《谈虎集》、《看云集》、《永日集》、《夜读抄》、《苦茶随笔》、《苦竹杂记》、《风雨谈》、《瓜豆集》、《秉烛集》、《艺术与生活》、《欧洲文学史》、《中国新文学的源流》、《过去的生命》、《知堂杂诗抄》の合計18種、他に陳子善が編集した既存の文集に含まれていない2種、《亦报随笔》、《四九年后》、さらに鐘氏自ら編集した《知堂书话》、《知堂序跋》、岳麓書社から出版された周作人の作品は合計22種とすべきである。残念なことに不都合な理由で、鐘氏の構想した計画はすべて果たせなかった。

鐘先生が編集した周作人の作品は、すべて簡体字本であり、鉛活字を使用して印刷され、手触りは凹凸感がある。表紙は元の版本の表紙を複写し、書名は周作人の直筆であり、簡潔ですっきりしながら、風格を放っている。このシリーズが非常に読者に支持されたのは、だいたいこのような理由による。ただこのシリーズは数年に分けて次々と出版されたので、全部揃えるのは、少し困難さを伴う。このシリーズのハードカバーは合本になっている。例えば《自己的园地・雨天的书・泽泻集》、《瓜豆集・秉烛谈》など、内容はソフトカバーと差はない。

《知堂书话》、《知堂序跋》及びその後、他から出版された《知堂谈吃》と《儿童杂事诗图笺释》、《周作人文类编》10卷本についても取り上げて話そう。

岳麓版《知堂书话》は、上・下二冊に分かれ、周作人の三十余りの文集から332編の文章を集め、文集により分類したものである。《知堂序跋》は233編を収め、五つに分けている。

後から出た海南版と岳麓版は一致しており、ただ《知堂书话》と《知堂序跋》は二冊の厚い本、ハードカバーになり、本のカバーもついて、趣があり、すっきりしている。人民大学版《知堂书话》に収録されている文は岳麓版とは異なり、文集に収録されていない文、未刊行のうち書物について語っている文を取め、内容が最初の2点よりやや多い。新しい“書話”は文章を内容によって、本と読書、中国の古書、旧小説、中国の新刊、東洋の本、西洋の本、自分の本の七つに分けている。古い“書話”に収めている文章は年順ではないが、新しい“書話”の七つのパートはすべて発表と執筆日時順に並べられ、周作人の読書生活の軌跡を見てとりやすい。三種の版本の違いは以上の通りであるが、鐘氏が「序跋も広義での書話に属し、三冊の本はやはり一つである。1986年岳麓版書話二冊、序跋一冊、1997年海南版合計二分冊、人民大学版は三分冊に戻っているが、文集に入っていない文や未刊行のものを加えている」と言うように、このシリーズの総括と看做すべきである。

《儿童杂事诗图笺释》も三種類の版本がある。いち早く文化芸術出版社より1990年代初めに出版された。第二種の版本は、中華書局の1999年版であり、版型は前者よりやや小さい第三版は岳麓書社2004年版、版型はちょうど良い。比べてみると、文化芸術版は不完全さを嫌い、中華版と岳麓版は版型の大きさ、簡体字繁体字の違いがあるだけで、中華版は印刷が精巧で美しく、絵と文章が細かく、繁体字の縦書きで、優雅さがある。岳麓版は版型が少し大きく、リプリントも原作に近づいており、読む時ははっきりしていて、ページが広く、威勢が大きいのは明らかである。

鐘叔河編《周作人文类編》10巻、ハードカバーには2,954編の文が収められ、合計600万余字、周作人自選文集28種1,200編が入っており、他に以前出版を果たせなかった《木片集》と《饭后随笔》約400編余り、自選集以外の文と出版されていない1,300編余りが加わり、豊富で多彩と言えよう。ただこれで周作人の文字になった作品を全部収録しているわけではない。翻訳作品と本となった専門書は慣例に従って収めていない。この“文类編”は、《中国气味》、《千百年眼》、《本色》、《人与虫》、《上下身》、《花煞》、《日本管窺》、《希腊之光》、《夜读的境界》、《八十心情》の10巻に分けられ、分類は本の副題に記されている。巻一“思想・社会・時事”：巻二“国史・国粹・国民”：巻三“文学・文章・文化”：巻四“自然・科教・文明”巻五“性学・儿童・妇女”：巻六“乡土・民族・鬼神”：巻七“日本・日文・日人”：巻八“希腊・西洋・翻译”：巻九“生活・写作・语文”：巻十“自叙・坏人・记事”，言葉は簡略であるが、各巻の内容がだいたい窺い知ることができる。この10巻本は岳麓書社との縁を続けることはできず、湖南文藝出版社から1998年に出版された。このシリーズの特徴は二つある。一つは文によって分類し、読者の検索に便利である。もう一つはこの10巻本は現在（2007年時点）周作人の作品を最も完璧に収めた版本である。こうしてみると、鐘叔河氏の周作人の文字に対するこだわりは、すべて鐘叔河編集本の中に傾注され、読者に恵みを施し、その功績と徳行は申し分ない。

鐘叔河編集本の周作人作品の他、鐘叔河氏自身も執筆し、文字の多くはまとめられて出版

されている。《念樓集》、《学其短》、《天窗》、《书前书后》、《中国本身拥有力量》などがあるが、ここでは別の話題なので、他で述べることにする。

5. 『周作人散文全集』

2009年4月に、広西師範大学出版社から全14巻、初版2,500セットで出版された『周作人散文全集』の編集・校訂者、鐘叔河は第1巻の前書きの中で、次のように述べている⁶⁾。

人婦人、文婦文。(人は人、文は文。) — 1986年広告

1998年春節(旧正月)の前、『文汇报读书周报』に、私の小文『辞年』が掲載された。その中で、「私が何を好んで辞めようというのか。……退職後元いた職場から「余力を発揮して欲しい」という好意を辞退し、これからは自分が読みたい本だけを読み、自分が言いたいことだけを言い、自分が書きたい文章だけを書き、当然自分が編集したい本だけを何冊か編集するかもしれない。……」と言った。

ここで編集したい本は、まず周作人の散文全集であり「人婦人、文婦文。」の6字は、私がこのことをする最初の宣言である。

1980年代初めに昔の仕事に復帰すると同時に、周作人の文章を編集して印刷するという気になった。8、9歳の頃から、兄姉の『复兴初中国文教科书』を見て、『故乡の野菜』と『卖汽水的人』の文が気に入った。反右派闘争の後、長沙市に流浪し、昼間は荷車を引き、夜は薄暗い15燭光の灯の下で、赤い罫線の材料紙に八道湾11号(周作人宛て)に手紙を書いた。すると以外にもすぐに返信、さらに揮毫入りの本と画仙紙に書かれた詩⁷⁾を受け取った。

それは周氏が老虎橋に作った旧作であり、私はそれを先輩文人がくれた信用だと看做した。70歳の老人が何を求めているのか、一人の五四運動において「新潮流に出入りした」老作家に、こともあろうに私という荷車引きが彼の文章を理解できると思われた。私は知己の感をどうして抱かずにおれようか。彼の「誓い」を努力して理解しようとし、「诚心期法施(心から施しを期待する)」という気力を馬耳東風に聞き流すように無駄に浪費してしまわないようにしよう。

そこで、自分がテーマを選び、本を出すことが可能になると、すぐさま『知堂书话』⁸⁾を編集印刷した。これは新中国成立後出版された最初の「周作人著」と署名された新刊である。続いて『自己的园地』、『雨天的书』などの「自編文集」の単行本の出版を開始し、新聞に「重印周作人著作」という広告を載せた。冒頭の箇所は、

「人は人、文は文。周作人その人の是非、功績と過失は別の問題である。その文の主な内容は伝統文化や国民性に対する反省であり、中欧と中日の文化歴史に対する比較研究である。今日の読者が一読しても差し支えない。」⁹⁾

だが『秉燭談』がまだ印刷できないうちに、湖南の“三種人”（三種の人）、『查泰萊夫人的情人（チャタレイ夫人の恋人）』、『丑陋的中国人（醜い中国人）』¹⁰⁾、と周作人は批判された。ある人は「人婦人、文婦文（人は人、文は文）」に対して、特に間違っているとし、「政治的に良くない人間の文章が良いはずがあるか」と問いただした。

政治を語ることは私の得意でもないし、私のしたいことでもない。幸いに政治を語る人の中にも文学が分かり、周作人を理解する人がいた。このことが私を1957年や1970年の境地にもう一度させることはなかったし、内情はあとで分かった。1991年5月19日、黄裳は手紙をよこして私に知らせた。

「去年、胡喬木が上海にやってきて、一度話をした。話が周作人に及んで、彼は自ら“法を守る”と言い、あのころ貴兄が周作人の本を再刊することを上申し、最後は彼のところまで来た。彼は他人が出版の許可に反対していることを相手にしないと告げた。話は情趣にあふれていた。」

胡喬木（こきょうぼく、1912～1992）は中華人民共和国の政治家、1932年中国共産党入党。延安時代は毛沢東の政治秘書。1948年新華社通信社長、党中央宣伝部副部長として毛沢東選集を編纂。1945年には若干の歴史問題に関する決議、1954年には中華人民共和国憲法の起草に関わる。1956年に中央委員、中央書記処候補書記となる。文化大革命で批判されたが、1974年に復活、1978年に新設された中国社会科学院院長、1982年に中央政治局委員となる。1987年に党中央顧問委員会常務委員となり第一線から退いた¹¹⁾。

それから、鐘叔河は胡喬木に好感を抱いた。彼の文章は『短些再短些』を読んだにすぎない。その後、秦人路が私に楼適夷が書いた一通の手紙を見せてくれた。胡喬木と周作人について述べたものだ。

「1952年私がわが社（人民文学出版社を指す）に転勤し職を得てから、胡喬木同志が中南海にいて、私を招いて約二時間、専ら周作人について話をしたことを覚えている。胡喬木は、周作人は新文化運動に功績があり、文学の上では博学博識であり、（中国）国内で得がたい人材である。出版社は周の生活待遇と仕事の条件を重視し、よく配慮すべきであると考えている。それから、一定の時期を過ぎれば、周の旧作を出版できると言った。

今、周の文集を出版することに、私は同意する。私は周作人が裏切り者であると思うが、もしもまだ党の指示がなければ、判決を正せず、裏切り者であっても、その本は今日でも出版できる。」

これもまた、「人は人、文は文」の態度ではなからうか。

ただ、周作人の作品を重版することはやはりうまくいかず、その後私は岳麓書社を離れ、この仕事は完全に中断してしまった。広告した35種の自編文集はついに出版することがなかった。

仕事をする気がある人間にとって、やりたいことを途中で放棄させられることは耐え難いものであるし、満足しないものである。そこで私は職場復帰を断り、退職し、“亦自有誓愿（また自ら誓いを立てた）”この誓いは周作人の散文作品を必ずそのまま印刷することである。私は信じる。胡喬木と嵯適夷の観点は、あらゆる文学を尊び文人を尊ぶ人間の観点であり、もし国家民族に望みがあるなら、この観点は必ずや次第に多数の人に受け入れられ、周作人の本は結局出せるし、うまく出せる。退職後、一般人になり、書物の編集も個人の仕事になった。編集したいものを編集し、編集の仕方も自由、報告をする必要もないし、誰かに許可をもらわなくてもよい。最悪の結果は編集しても印刷できないことであるが、それもないことではない。今年印刷できなければ、来年印刷できるだろう。この世で印刷できないなら、来世で印刷できる。「地面を掘って蛇を探したたく」ような、文人の中で闘いの相手を探し、人と闘うことに尽きない喜びを感じる人間は、結局やめないはずがない。永遠に一言が九つの鼎（かなえ）にも等しいのだ。

『知堂書話』を出版してから、二十年以上の歳月を経て、鐘叔河が編集、校訂した『周作人散文全集』は世に出た。

6. 楊小洲『編年体「周作人散文全集」を読んだ幾つかの感想』

2009年7月22日『中華読書報』に、人民出版社から出た『魯迅著訳編年全集』の編者の一人である止庵へのインタビュー記事に合わせ、ほぼ時を同じくして出版された鐘叔河編『周作人散文全集』（広西師範大学出版社）について、同紙書評メンバーの一人である楊小洲の書評『編年体「周作人散文全集」を読んだ幾つかの感想』（読“編年体”《周作人散文全集》的几点感想）が掲載された。『周作人散文全集』も『魯迅著訳編年全集』と同じく編年体を採用した。

『周作人散文全集』は掲載発表順に並べているが、執筆日時とは異なる。「周作人の日記を見ると、一日に四、五編の文章を書き、その上友人と手紙のやりとりをして、生涯二万通あまりに達した。このように溢れる才能があったのに、掲載日時に周作人の創作を計ろうとすると、その人並み外れた所が見出せない。」と、楊氏はこの書評で以下のように述べている¹²⁾。

钟编《周作人散文全集》所收周氏文章起自一八九八年戊戌日记，止于一九六六年译作《赫刺克勒斯的故事》，算来编入知堂的文章约有六十八年，可以概其一生。此“散文全集”收入的文章皆注明刊载时间与刊物名称，用意当在便于读者查询，并于写作顺序了解周氏生平交际，譬如《知堂回想录》原已成书，在全集里则需按时间拆散，分置于不同之处，其他如《秉烛谈》，《药味集》，《药堂语录》，《书房一角》等皆复如此。不过这样做也有不妥处，便是刊载时间非写作时间，而以周氏之大才气，常有急就章挥笔可得，见其日记载可日写三五篇文字，另还有与友朋书信往还，一生约两万余通。如此横溢之才思，若按刊载时间以计知堂写作，则未必能够

看出周氏此番超人之处。“散文全集”里所收与曹聚仁，鲍耀明书信，由香港版《周曹通信集》，《周作人晚年手札一百封》和《周作人晚年书信》辑得，那封“说北京有四大不要脸”也在其中。然收进的日记择于大象版《周作人日记》，偶或有几篇未曾结集出版的日记选入，其他日记仍不能见到，因而知“散文全集”日记选编无多突破。

続いて楊氏は、「編年体の周氏の散文全集は、周作人の創作の年代ごとの発展をたどり、周氏の文章と思想の脈絡と軌跡を見出し、周氏の文章の作風の変化を見つけ、周氏の文の異なる時期における特徴を審査することができ、以前出た鐘叔河編集の『周作人文類編』より一層意義がある。」と評価し、さらに、「全集に収められているいくつかの文章はすこぶる検討に値する。例えば“今後二度と裏庭に来ないでくれ”と魯迅に書いた絶交の手紙、周氏 1923 年 7 月 19 日に記載があるが、『周作人文類編』に収められたときは『魯迅への絶交の手紙（与魯迅絶交書）』という表題だったが、今回元のまま散文全集第三巻に収める際には『魯迅への手紙（与魯迅書）』に表題を改められた。おそらく鐘先生がこの手紙を全集に入れた意味は、できるだけ周氏の文章を収めて、読者の研究の便宜を図るためである。」と、鐘叔河の編集の苦心を見てとる。

注

- 1) 鐘叔河__百度百科 <http://baike.baidu.com/view/1661100.htm>
- 2) 鐘叔河『一个平凡的读书人』，鐘叔河『与之言集』世界图书出版公司北京公司 2012.4. 所収
- 3) 楊小洲は 1961 年、湖南省長沙市に生まれる。近著に 2004 年 10 月から 2006 年末まで、『新京報・書評周刊』に掲載された書店散策の文章、以降の文章をまとめた『逛书店』（上海人民出版社，2012 年 11 月）がある。同書には 27 軒の特色ある書店が紹介されている。
- 4) 楊小洲『钟叔河编周作人作品比较谈』
<http://yxzblog.163.com/blog/static/11616481020080212202894/>
- 5) 香港三育图书文具公司 1974 年 4 月初版
- 6) 鐘叔河『編者前言』、『周作人散文全集』1. 広西師範大学出版社 2009.4 所収
- 7) 周作人『丙戌岁暮杂诗・文字』，周作人自編集・止庵校訂『老虎桥杂诗』（北京十月文艺出版社，2013.1.）所収
「半生写文字，计数近千万。强半灾梨枣，重叠堆几案。
不会诗下酒，岂是文作饭。读书苦积食，聊且代行数。
本不薄功利，亦自有誓愿。诚心期法施，一偈或及半。
但得有人看，投石非所恨。饲虎恐未能，遇狼亦已惯。
出入新潮中，意思终一贯。只憾欠精进，回顾增感叹。」
- 8) 『知堂书话』（上・下）周作人著，鐘叔河編（岳麓書社，1986.）
- 9) (原文) 人归人，文归文。周作人其人其人的是非功过是另一个问题，其文的主要内容是对传统文化和国民性进行反思，对中西与中日的文化历史作比较研究，今之读者却不妨一读。
- 10) 『醜い中国人』柏楊著，張良澤，宗像隆幸共訳，光文社〈カッパブックス〉1988.
著者は同書の中で、中国文化の本質を「漬物甕（つけものがめ）文化」だと定義し、その淀んだ灰汁（あく）が中国人をダメにしていると強調する。「自分の非を絶対に認めない」「永遠

に団結しない」「民主も君が民，私が主」というように。

11) 胡喬木 - Wikipedia

12) 『中華読書報』2009年7月22日9頁「書評周刊 総第142期」

